

May 2017 subject reports

Japanese A: language and literature

Overall grade boundaries

Higher level

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 12	13 - 28	29 - 46	47 - 59	60 - 71	72 - 84	85 - 100

Standard level

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 11	12 - 27	28 - 42	43 - 57	58 - 71	72 - 85	86 - 100

Internal assessment

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 4	5 - 9	10 - 13	14 - 17	18 - 20	21 - 24	25 - 30

提出された成果物の特徴および適切さ

全体的に、受験者のテキスト分析力は高いレベルにあり、よく準備をしてオーラルに備えている事も窺えました。使用されたテキストは大部分において適切でしたが、

短すぎるものやチャレンジ性の低いものもいくつか見受けられました。目立ったのは、コメントリーの冒頭で不要な事を述べるのにかなりの時間を費やしている受験者が多かったことです。テキストについての背景や、テキストに出て来ない登場人物の説明等で、長い場合は 5 分弱も費やしているケースもありました。また、ガイディングクエスチョンを読み上げるよう指導している学校もあるようですが、その時間もコメントリーにまわした方がよいでしょう。時に、教師がした質問に教師自身が答えたり、生徒の答えを教師が望んでいる形に言い直したりするのも見られましたが、受験者が答えたことを受け入れ、必要な場合はさらなる質問をするか、そうでなければ次の質問に進んで多くの機会を受験者に与えるようにする方がよいでしょう。さらには、たとえ受験者が間違った事を言っても、受験者が萎縮しないような教師の受け答えも望まれます。

評価規準に基づく受験者の到達度

□□ A (テキストまたは□□ についての□□ と□□)

多くの受験者はテキストについての適切な論評を展開しており、教師がいかにかしっかり教えているかが伝わってきました。しかし、語彙不足等から理解していても説明が分かりにくい受験者が前回より若干多かったのが気になりました。受験者のほとんどの論評にはエヴィデンスがあり、この点においても適切に指導がなされていることがわかります。ただ、エヴィデンスの参照においては、行数だけでなく具体的な表現を取り上げる方が説得力が増すことは言うまでもありません。

□□ B (□□□□□ およびその□□ についての□□)

この規準においても受験者がしっかり指導を受けていることがわかりました。コメントをつけている文学的特徴がテキストの内容や主題にどう関連しているのかについて言及しているコメントリーは高得点に結びついています。一方、テキスト内で見つけた文学的特徴の意味を説明しているだけで終わっている場合は点数が伸びていません。これは、レトリックへの言及において特に顕著でした。

□□ C (□□)

一貫性のある整理された構成にはいくつか方法がありますが、教師の指導する 1 つの方法にその学校の受験者全員が従っているようでした。どの方法であっても、全体的に一貫して論理性のある構成がとれていれば高い評価につながっています。しかし、作者の背景を年代ごとに説明したり、数分を費やしてテキストについての背景情報を説明したりなどというような、論評とあまりつながりのないイントロダクション、意味もなくテキストの始めから行ごとにコメントをつけているコメントリー、また、ガイディングクエスチョンのみに答えて終わっているものは低い評価となっています。力のある受験者は、ガイディングクエスチョンのみに答える構成であっても、それぞれの質問を結びつけつつ、テキストまたは抜粋の主題等と関連づけるといった論理的な構成に成功していました。

□ □ D (□ □)

全体的に語彙力と適切な使用言語域（レジスター）の使用力が下がっています。後者で目立ったのは、頻繁に文末の語調が上がる話し方、カタカナ用語の多用、不完全な文、オノマトペの乱発、そしてカジュアルな言葉遣い（「けど」、「さっき」、「やっぱ」、「すごい」、「わかんなくて」、「だって」、「ちっちゃい」、「私が思うには」等）です。移行表現においてはより意識されて使うことができるようになっているようです。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

- 1) 受験者のコメントリーが 10 分に満たないものが例年より多く見られ、中には 6 分弱で終わっているものもありました。時間を計りながら、受験者が 10 分とはどのくらいの長さなのかを感覚的につかめる練習時間をとるとよいでしょう。
- 2) 教師の適切な質疑によって、受験者がより多くの知識と理解を提示できるようにすることを考えると、テキストに直接関係した質問に集中することが望めます。本の感想や受験者の生活への影響についての質問に数分を費やすのは受験者にとって有利とは言えません。
- 3) 受験者が自分にとってやりやすい構成を選択できるよう、様々な構成方法について指導し練習する機会を作るとよいでしょう。
- 4) 受験者がコメントリーをしている最初の 10 分間は、極力途中で邪魔しないようにすべきでしょう。教師の相槌によって受験者の言っていることがかき消されると言う極端な場合もありました。また、受験者に 13～14 分話し続けさせるよりも、切りのよい所で止め質疑に移った方が、理解を示す機会の増加につながります。
- 5) 15 分の時間は有効に使うことが望めます。11 分ほどで終わるのは受験者のチャンス縮小しています。また、短すぎるテキストゆえに 15 分続かなかつたのではないかと思われる場合も見られたので、そのような点を考慮した抜粋を選択するようにしてください。
- 6) 目的に相応しい言葉遣いの練習をより頻繁に行うとよいでしょう。特に、カジュアルな言葉遣いやカタカナ用語の頻発をコントロールすることができるようになってほしいと思います。
- 7) テキストには必ず行数を打つようにしてください。受験者が行数を数えなければならず、時間が無駄になっているものもありました。また、テキストを作成する場合は漢字の間違いのないよう、十二分な配慮をお願いしたいと思います。
- 8) わずかではありましたが、A のレベルではない受験者も見受けられました。受験者のコース選択には慎重を期さなければなりません。

Higher level written task

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 5	6 - 11	12 - 18	19 - 23	24 - 28	29 - 33	34 - 40

提出された成果物の特徴および適切さ

記述課題 1

全体的に本プログラムの主旨・内容を良く理解し、指導がなされていることが窺えました。パート 1 とパート 2 においても様々なテキストが導入されており、より幅広い観点から学習が出来るよう多くの学校が工夫をしていました。提出された作品の質も向上しており、受験者の本課題に対する理解もより深くなっていると感じました。パート 1 とパート 2 で扱った作品のテキストタイプも多岐にわたっており、「新聞記事」「雑誌記事」「スピーチ原稿」といったものから「ブログ記事」まで、テキストタイプの特徴をよく理解した上で課題が作成されていました。パート 3 とパート 4 の文学のパートを扱った受験者も作品の内容を非常によく理解しており、作者の文体を模倣しとても興味深い課題を作り上げていました。受験者の多くが「手紙」「日記」「続編」をテキストタイプとして選び作成していましたが、中には「書評」「パステージュ」といったスタイルで書かれている作品もありました。

記述課題 2

受験者の多くが設問の意図を明確に把握し、適切な箇所からの引用や解説を根拠として交えながら論じる事が出来ていました。全体的に用いられている語彙のレベルも高く、序論—本論—結論の構成もきちんと意識しながら述べる事が出来ていました。多くの受験者が、論文の書き方をきちんと理解した上で課題を作成していたようです。

評価規準に基づく受験者の到達度

記述課題 1

規準 A (課題の解説)

「課題の解説」に入れるべき内容について明確な理解がなされていない作品が多く見られました。特に「パート名」「受け手(対象読者)」「記述課題の内容がどうパートと関連づけられているか」という点について触れていないものが目立ちました。『「言語 A: 言語と文学」指導の手引き』(p.48~49)に「課題の解説」で説明すべき項目が明記されていますので、受験者が入れるべき内容を認識出来るように必ず授業の中で確認をするようにして下さい。

規準 B (課題と内容)

非常に想像力のある興味深い作品が多くありました。特にパート 3 とパート 4 の文学作品を扱った受験者は、作品の内容を非常によく理解し、上手く引用を取り入れながら作者の文体の特徴を模倣し、高度な作品に仕上げていました。テキストタイプとして「コラム」を選択していた受験者の中で小論文の形式で作成しているものもありました。「コラム」には様々な形式がありますので、新聞のコラム・雑誌のコラム等(雑誌であればどのような雑誌か)を明確にするようにしましょう。

規準 C (構成)

受験者の多くが構成を意識し、一貫性のある作品を提出していました。特に、扱った作品の続編、脇役の視点から書かれた小説、手紙等は原作を深く分析・理解し、効果的な構成の下、作成されていました。

規準 D (言語とスタイル (文体))

語彙のレベルに非常に大きな差が見られました。提出した作品において、意図的に常体と敬体を混合しているケースや本来漢字で書けるべきものを平仮名・片仮名を用いて書く場合は、その目的と効果を「課題の解説」で説明するようにして下さい。

記述課題 2**規準 A (概要)**

「概要」と記述課題 1 の「課題の解説」を混同している受験者がいました。「概要」はあくまでアウトラインであり、作成した論文のポイントを説明するためのものです。「概要」に入れるべき項目は『「言語 A: 言語と文学」指導の手引き』(p.50)に明確に記されていますので、このセクションをよく読んだ上で指導をするようにしてください。

規準 B (設問に対する答え)

受験者の多くが設問の意図を正しく理解し自らの論文の主題を明記し、一貫性のある論文を作成できていました。作品からの引用や具体的な例の提示も適切な箇所や資料からなされており、根拠に基づいた論の展開がなされていました。その一方で、中には、設問の意図に対する明確な理解がなされていなかったことからか、設問の主旨からかけ離れた内容を論じた論文や、設問には一切触れていない論文もありました。

規準 C (構成と議論)

全体的に構成をきちんと意識したうえで、論文が作成されていました。特に「概要」の必須事項である「課題の重点を 3-4 つの主要なポイントにまとめた説明」をきちんと示したうえで、それに沿って構成されていた作品は、明瞭で論全体に一貫性のある小論文に仕上がっていました。

規準 D (言語とスタイル (文体))

多くの受験者が適切な語彙を用いて論文を書く事が出来ていました。ただ、助詞の使い方等の文法的な誤りが所々目につきましたので、普段の授業の中で定期的に小論文を書く練習を取り入れることが必要だと思います。またコンピューターによる

タイプミスなのか脱字が多く見られる答案がありました。最終的に提出をする前に何度も読み返し、誤字脱字をきちんとチェックするようにしましょう。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

- 1) 記述課題 1、記述課題 2 の両方をパート 3 の作品を用いて作成している受験者がいました。記述課題 1 をパート 1 あるいはパート 2 で扱ったものを用いた場合、記述課題 2 は、パート 3 あるいはパート 4 の作品で作成しなければなりません（またはその逆）。
- 2) パート 1、パート 2 は、主に言語的要素に焦点を当て指導をする必要があります。特に課題 1 で提出された作品の中には、言語とは関連性のない社会問題のみについて触れている作品もありました。本課題について授業で説明する際には必ず「言語の観点」ということを受験者に認識させるように指導をするとよいでしょう。
- 3) 記述課題 2 において作成する「概要」は、論文の構成を明確にするためにもとても重要です。必要とされる記載事項を受験者が正しく理解し作成出来るように授業の中できちんと指導をしてください。
- 4) 受験者の多くが直接引用または間接引用を用いて論拠を示し、脚注を用いて引用箇所を明らかにしていました。脚注は必須ではないものの、論拠となる引用箇所や参考とした関連資料を明確にするためにも「参考文献目録」は論文と共に必ず提出するようにしてください（『指導の手引き』 p.51 参照）。
- 5) 受験者の名前、学校名、受験者番号は一切記載しないようにしてください。

Standard level written task

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 2	3 - 5	6 - 9	10 - 12	13 - 14	15 - 17	18 - 20

提出された成果物の特徴および適切さ

全体的に本プログラムの主旨・内容を良く理解し、指導がなされていることが窺えました。HL 同様にパート 1 とパート 2 においては様々なテキストが導入されており、より幅広い観点から学習が出来るよう多くの学校で工夫がなされていました。提出された作品のテキストタイプも多岐にわたっており、それぞれの特徴をよく理解した上で作成されていました。全体的にパート 3 とパート 4 の文学作品を扱った

ものが多く見られました。「課題の解説 (Rationale)」に記載されるべき項目を欠く作品がまだ多くありましたので注意が必要です。

評価規準に基づく受験者の到達度

規準 A (課題の解説)

「課題の解説(Rationale)」に入れるべき項目が抜けている答案が目につきました。中でも特に「パート名」「受け手(対象読者)」「記述課題の内容がどうパートと関連づけられているか」という点について触れていないものが多くありました。SLについては、『「言語 A: 言語と文学」指導の手引き』(p.36)に「課題の解説」で説明すべき項目が明記されています。受験者が入れるべき内容を認識出来るように必ず授業の中で確認をするようにして下さい。また、「課題の解説」の字数制限は600字です。600字以内で作成すると共に、字数は「課題の解説」のページにも記載するようにしましょう。

規準 B (課題と内容)

バラエティに富んだ様々なテキストタイプを用いて課題が作成されていました。パート1とパート2を選択した受験者のほとんどが言語に焦点を当て、課題を作成出来ていました。しかし、提出された答案の中には言語的な観点については一切触れず、社会問題を中心にした広告等も見られました。パート3とパート4の文学作品を扱った課題においても工夫を凝らしたユニークな作品が多く見られました。「手紙」「日記」「続編」といったものから「序章」「番外編」「パステージュ」などと、テキストタイプも随分と幅広い種類のものが用いられるようになってきています。ただ、中には、作品の内容を理解せず全く関連性の無い事を書き綴っているものもありました。

規準 C (構成)

受験者の多くが構成を意識し、一貫性のある作品を提出していました。記述課題の字数は、1600字から2000字です。字数制限(2000字)を超過した場合は減点の対象(2点減点)になりますので、提出する際には必ず字数を確認し、受験者本人が認識出来るようにきちんと課題にも明記するようにしましょう。

規準 D (言語とスタイル(文体))

ほとんどの受験者が適切な語彙を用いて課題を作成していましたが、ところどころ助詞の誤用や主語と述語のねじれ等の文法的な誤りが目につきました。またコンピューターによるタイプミスや脱字が多く見られる答案もありました。最終的に提出をする前に何度も読み返し、誤字脱字の有無をきちんと確認するようにしましょう。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

1) パート1、パート2は、主に言語的要素に焦点を当て指導をする必要があります。提出された作品の中には、言語とは関連性のない社会問題のみについて触れている作品もありました。本課題について授業で説明する際には必ず「言語の観点」ということを受験者に認識させるように指導をするようにしましょう。

2) 受験者の個人的な情報（受験者の氏名、学校名、受験者番号等）は一切記載しないというルールがまだ守られていない学校があります。アップロードをする前に必ずこの点について確認をするようにして下さい。

Higher level paper one

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 2	3 - 5	6 - 9	10 - 11	12 - 14	15 - 16	17 - 20

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

文体、表現技法など言及はしているものの、それらがもたらす効果まで論じている答案は、あまりありませんでした。テキスト A の新聞記事の内容把握も難しかったようです。デジタル版の新聞ということを理解していない生徒もいました。また、テキスト C では、『俳句で日本を読む』という本からの抜粋ということを考慮せず「河豚を食べる」ということに重点を置いて論じたために、著者が芭蕉の句に見出した生死の共存やパラドクスにまで言及することができなかつた受験者が多く見られました。問題 2の方が、分析が難しかったようです。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

多くの受験者が、根拠をしっかりと示しながら文脈、読者層、目的を論じていました。イラストや写真からその内容を的確に把握することもよくできていました。また、各々のテキストの要点をよく理解し、相違点や共通点をバランスよく論じていました。文法の間違ひも比較的少なかったです。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

問題 1（テキスト A&B）

新聞記事の特徴である、「内容が客観的に書かれている」ということを述べていない答案がほとんどでした。また、第三者の意見を取り入れることによって内容の信憑性を高めていることに気づいていた受験者はあまりいませんでした。以上の 2 点より、テキスト A の踏み込んだ解釈や分析が難しかったと言えます。多くの受験者が内容の説明で答案を埋め、しっかりとした分析ができていなかったことが気になりました。また、テキスト B では、イラストから読み取れる内容理解はよくできていましたが、字体、文体について述べている生徒は少なかったです。

問題 2 (テキスト C&D)

テキスト C の内容を捉えることが困難であったようです。このテキストにおいて、著者の李御寧は河豚についての俳句を通じて日本人の食に対する姿勢や生死の混淆に思いを馳せていますが、この部分を捉えてきていない受験者が目立ちました。また、テキスト D では、読者層の分析が弱く、内容把握が浅かったのがやや残念でした。また、文体の使い方、写真を取り入れた効果について説得力のある論を展開している生徒は多くありませんでした。しかし、中には読み手に親しみを持たせる工夫がどのように示されているかを巧みに説明している答案もありました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

表面的な内容理解に基づくあらすじや内容の説明だけでなく、文体や修辞法がもたらす効果や著者の意図などを深く考え分析ができるよう、たくさん作品に触れ、読解力を高めていってほしいと思います。テキストの解釈について授業内でディスカッションを重ねることも有効でしょう。また、時間内で説得力のある論評を書けるよう、日ごろから練習を重ねておくことも必要です。なお、全体的に平仮名書きや、正確でない曖昧な漢字が多いのが気になりました。もう少し漢字学習に力を入れると良いでしょう。

Standard level paper one

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 2	3 - 5	6 - 8	9 - 11	12 - 15	16 - 18	19 - 20

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

「試験問題 1」では課題文の技法をただ単に羅列するのではなく、その技法がどのような効果をもたらしているかを考察し、テキストをさまざまな角度から読み取り批判的に分析することが求められています。例えば、今回のテキスト 1 の新聞記事であれば、与えられた情報を評価するだけでなく、その情報が誰の視点で語られているのか、その結果、語られない情報は何か、それによって生じるバイアスは何かなどといった側面まで分析が及んだ受験者はごくわずかでした。また、テキスト 2 では、最後の文章から抜粋部分が本の冒頭にあることを読み取ったうえで、冒頭部分の役割や著者の意図、内容および表現等をつなげて総合的に論じることができればなお良かったと思います。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

テキストの目的、読者層を意識した言葉、スタイル上の特徴や表現技法およびその効果はよくとらえられており、日頃の授業の成果が出ていたと言えます。また、問題文から引用して説明するなど、根拠を示しながら答案を組み立てていた点においても、よく準備してきたことが窺えました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

テキスト 1

新聞のインタビューであることに気づいたうえで、新聞記事の特徴としての見出しや写真の持つ効果について分析していたり、日米のビジネスモデルを対比させた構成などの特徴を指摘していたりした点は評価できます。しかし、「スマートマネー」や「エスタブリッシュメント」などのカタカナが経済用語としてではなく、「強調したいからカタカナで表記した」など説得力や根拠に欠ける論も見受けられました。また、ベンチャーの成功例のみを挙げていることや、日本の既存の風土に対する批判が読者の記事のとらえ方にどのような影響を与えるかまで論じることは難しかったようです。

テキスト 2

多くの受験者が、科学書であっても平易な語句や具体例を使うことで、読者にとって理解しやすい内容になっていたことを指摘していました。また、「スーッ」「ハーッ」「ドキンドキン」といった擬音語がもたらす効果や、「ネズミ」と「ゾウ」というわかりやすい例を用いた著者の意図などはよく分析できていました。しかし、「自分の時計は何にでもあてはまる、と何気なく信じ込んで暮らしてきた」（15～16行目）「ヒトがおのれのサイズを知る、これは人間にとって、もっとも基本的な教養」（19～20行目）などの文章が意味するところをしっかりとつかめていない受験者が目立ちました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

SLにはそれぞれ2問の「考察を促す問い」が記載されています。これらは分析の手がかりとなるように作成されていますので活用することを推奨しますが、必ずしもこの問いに答える必要はありません。

SLの「試験問題 1」では1つのテキストを深く分析することが求められています。課題文の内容を言葉を変えて説明したり、課題文をもとに自分の意見を述べたりするものではありません。文字数に決まりはありませんが、あまりにも短いと当然内容も浅薄なものになってしまいます。制限時間内でテキストをしっかりと読み込んで分析をし、まとまった量の文章（1200文字以上を目安にすると良いでしょう）は書けるように日頃から練習を重ねると良いと思います。

Higher level paper two

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 4	5 - 8	9 - 11	12 - 15	16 - 18	19 - 22	23 - 25

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

設問が意図する内容を理解し、それに対する適切な考えや意見を文章として表す事に困難を感じている受験者が多く見受けられました。中には、練習で書いた論文をそのまま暗記して転用したためか、設問とは全く関係のない答案もありました。また、設問中の問いが二つあるにも関わらず、一部のみに回答をしている答案も多くありました。

文学的特徴についてその名称や使用箇所については小論文中で触れられていたものの、その表現技法を用いた効果までを明確に述べていた答案はあまり見られませんでした。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

学習した作品についてはほぼすべての受験者がよく理解出来ていたと思います。作品の時代的・社会的背景についての知識をきちんと持ち合わせている事も答案の内容から窺えました。普段の授業の中で書く練習を多くしていた生徒は、適切な箇所における作品からの引用もきちんと出来ていました。また文章の構成についても、序論の部分で設問の内容を命題として明確に示していた受験者は、本論においても2つ以上の作品を効果的にバランスよく扱い、全体的に流れるような構成の下で明快に論文を作成出来ていました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

設問1：作品における「時間軸」や「時間の流れ」の扱われ方とその効果について問う設問でした。高得点の答案は、各作品における時間軸の特徴を明確に挙げ（例えば、20年、30年といった長い年月を舞台とした作品と3、4日という短い期間を舞台としたもの）、各時間軸の使用がどう作品の主題や登場人物の心情理解等に効果的か、具体例を引用しつつ論じる事が出来ていました。「時間軸」という問いが漠然としていることから、扱った作品における「時間軸」の明確な定義付けがなされていなかった作品は、結果的に一貫性のない論文になっていました。

設問 2：この設問を選んだほとんどの受験者が作品で用いられる表現技法や文体について具体的な例を作品から引用しながら、その効果も含め適切に論じる事が出来ていました。さらに、「読者を引き付ける」という点においても「引き付ける」という行為が具体的に何を意味するのか、きちんと自らの言葉により定義付けることで、より明確に考えを論じることが出来ている受験者もいました。

設問 3：設問の意図をよく理解し論じる事が出来ていました。異なる登場人物が語り手とされていた場合を例に挙げ、作品からの引用も巧みに用いながら、語り手と読者の関係をきちんと根拠を提示しながら明快に論じる事ができていました。全体的にこの設問を選んだ受験者は構成を意識し、流れるように論を展開出来ていました。

設問 4：この設問を選んだ受験者は作品の深い部分まで非常によく分析し論じる事が出来ていました。作者が意図したことを作中からの具体例を用いて示すだけではなく、さらに分析を進める事で対局する概念やそこから導かれ得る読者の解釈について、自らの考えるところをうまく論じる事が出来ていました。

設問 5：この設問を選択した受験者は非常に少なかったのですが、設問で問われている「文体（スタイル）」の解釈が出来ていない答案が目立ちました。そのため「文体」という表現が論文中で用いられていても、扱った作品においてどのような文体（スタイル）が用いられていたのか、またそれが登場人物の描写や読者の登場人物の捉え方にどのようにつながるかまで論じる事が出来ていないという答案が多くありました。また、作品のあらすじ、作者の背景等について長々と書いたために設問に答えられていない答案も多くありました。設問を選択する際に問いの意図を正しく理解し、適切な答えられそうかどうかを見極めることが非常に大切です。

設問 6：多くの受験者がこの設問を選択していました。「物事の特徴の側面」については具体的に扱った作品から例を挙げ上手く解説がされていましたが、「普遍的な概念」「価値」という部分に対する解釈が浅く、明確な定義がなされていなかった事から説得力に乏しい論文となってしまっている作品も多くありました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

1) 多くの受験者が原稿用紙 8 枚以上で答案を作成していました。量よりも質の方が大切ですが、少ない枚数の答案では作品の理解が浅く、設問の意図も明確に把握できていないことが多かったです。また、多く書いていた答案の中には、時間配分がきちんと出来なかったためか答案の結論部分まで書き上げられていないものもありました。出来るだけ早い時期から授業の中で時間を計り、制限時間内で書く練習をすることは 2 時間という時間感覚を受験者が持つためにもとても大切です。過去の設問等を課題とし、定期的を書く練習を取り入れるようにしましょう。

2) 制限時間内でより多くの内容を書こうとした焦りからか、常体と敬体の両方を用いて書かれている答案が幾つか見られました。論文全体として常体を文体として用い、正しい助詞や助動詞を使い論文作成が出来るよう、普段の授業の中で指導をするようにしてください。また、接続詞や文末表現等においても同じ言葉を繰り返し

用いるのではなく、さまざまな表現を用いて論文を書く事が出来るよう練習時から指導をするようにしてください。

3) 答案を書く上で必ず使用するであろう作者名、作品名、登場人物の名前、表現技法の名称等は正確な漢字を用いて書けるように練習をしておいて下さい。また、基本的な漢字においても漢字テストを定期的に授業の中で行い、正しく書く事が出来るようにしておく事が大切です。

4) 原稿用紙の使い方にも誤りが多く見られました。行頭に句読点は打たない、作品名や引用部分はカギ括弧で括る等の基本的な原稿用紙の使い方は授業の中でもきちんと指導をするようにして下さい。

5) 受験者名が明記されている答案が幾つかありました。名前は答案には書かないということを受験者に認識させるようにしておいてください。

Standard level paper two

Component grade boundaries

Grade:	1	2	3	4	5	6	7
Mark range:	0 - 3	4 - 7	8 - 10	11 - 14	15 - 18	19 - 22	23 - 25

今回の試験で受験者にとって難しかった内容

選択した設問の意図を正しく理解していたか否かで受験者の論文の質に大きな差が見られました。設問の意図を理解出来ていなかった答案の中には、設問とは関連のない事柄を論じていたり、設問の内容には触れず、作品の粗筋や作者についての解説をしていたりするものが多くありました。扱った作品に関連する表現技法については、受験者の多くが意識的に解説することを試みていました。ただ、その名称や使用箇所までは示していたものの、その効果までを明確に説明できている答案は非常に限られていました。

漢字で書くべき基本的な語彙を平仮名で書いている答案が多くありました。中には、作品名や作者名も正しく書く事が出来ていないものもありました。文法的な誤りも随所に見られ、特に助詞・助動詞が正しく使用されていない答案が目立ちました。また、原稿用紙の使い方にも誤りが見られ、句読点が行頭におかれていたり、作品名や引用部分がカギ括弧で括られていなかったりする答案も見られました。

今回の試験において受験者がよく準備できていたこと

受験者の多くが学習した作品をよく理解し、具体的な例を用いながら論じる事が出来ていました。また作品の時代的・社会的背景についての十分な知識を持ち合わせている事も論文の内容から窺えました。全体的に小論文はしっかりと構成されており、序論の部分で設問の内容を命題として明確に示していた受験者は、本論から結論に向け非常に明快地論の展開ができていました。

設問ごとの解答結果（強みや弱点）

設問1：作品における「時間軸」や「時間の流れ」の扱われ方とその効果について問う設問でしたが、非常に多くの受験者がこの設問を選択していました。高得点の答えは、「時間軸」や「時間の流れ」が扱った作品のどの箇所でもどのように用いられているか適切な引用を示しながら解説がしていました。さらにその効果についても具体的に例を挙げ（対象読者の主題への理解の深まり等）明快地論じる事が出来ていました。一方で、設問の意図を理解していなかった受験者の中には、作品の内容とは全く関連性の無い事柄や自らの体験談を語っているものもあり、作品に対する理解も浅いようでした。

設問2：この設問を選択した受験者はあまり多くはいませんでしたが、ほとんどの受験者が作品で用いられる表現技法や文体について具体例を挙げ、適切に論じる事が出来ていました。さらにそれらの表現技法を用いることによりもたらされる読者への効果についても、扱った各作品の内容を用い、詳細に解説がなされていました。この設問を選んだ受験者のほとんどが構成を意識し、流れるように明快地文章の展開が出来ていました。

設問3：この設問を選んだ受験者の多くが設問の意図をよく理解して論じる事が出来ていました。作品において「語り手の視点」がどのように扱われているか（一人称的視点、三人称的視点等）、そしてどう読者の理解に影響を及ぼすか、具体的に作品からの引用を根拠として用いながら解説がなされていました。視点についての設問は過去に何度か出題されていた事もあり、この設問を回答した受験者はよく準備をしており比較的よく出来ていました。

設問4：高得点の答えは、作品の深い部分までを分析し理解した上で論じる事が出来ていました。また、「作者が意図した」内容を作中からの引用を用いながら示すとともに、作者の意図したものとは異なるものが何かについても、作中からの具体例を根拠として用いながら自らの考えを明確に論じる事が出来ていました。しかし一方で、設問の意図が理解できなかったためか、一切設問には触れず論じている答案もありました。

設問5：設問で問われている「文体（スタイル）」の解釈が出来ているか否かで書かれた論文の出来に差が生じていました。高得点の答えは、扱った作品においてどのような文体（スタイル）が用いられていたのか、またそれが登場人物の描写、読者の登場人物の捉え方にどのようにつながるかまで明確に論じる事が出来ていました。その一方で、作品のあらすじ、作者の背景等について書くばかりで、問いに答えていない答案も目立ちました。

設問6：「物事の特徴の側面」については具体的に扱った作品から例を挙げ上手く解説がされていましたが、「普遍的な概念」「価値」という部分に対する解釈が浅く、

明確な定義がなされていなかった事から説得力に乏しい論文となってしまうている答案も多くありました。

今後の指導に関する提案およびアドバイス

- 1) 日頃からタイプをすることに慣れてしまっているためか、漢字で書くべき部分が平仮名で書かれている答案、誤字が多い答案が目立ちました。基本的な漢字の学習のために、普段の授業で漢字テスト等を定期的に行い、論文を書く練習をする際にも意識をして漢字の使用を試みるよう指導をしてください。また、作者名、作品名、登場人物の名前、表現技法の名称等は必ずといっていいほど論文で使用します。正しい漢字を用いて書く事が出来るように練習をしておいてください。
- 2) 評価規準をきちんと理解して論文を書いている受験者とそうでない受験者の間で論文の質に大きな差が見られました。評価規準を正しく理解し、それを意識して論文を書く事はとても大切な事です。論文を書く練習をする際には、その都度必ず評価規準を意識するようにすると良いでしょう。
- 3) 1 時間半という短い制限時間の下、二つの作品を用いながら設問に答えるというのは容易な事ではありません。時間配分がきちんと出来ていなかったため結論部分までを書き上げられていなかったり、途切れた状態で結論部分に無理に繋げたりしている答案もありました。時間感覚を受験者が持つ事ができるようにするためにも、出来るだけ早い時期から制限時間内で原稿用紙に手書きで答案を書く練習をすると良いでしょう。また、一貫性のある論文を書くためには構想を練ることが必須です。いきなり論文を書き始めるのではなく、アウトラインを作成しそれに添って効果的に論を展開出来るよう、授業の中でもアウトラインの作成について指導をするようにしましょう。そして過去の設問等を課題とし、定期的を書く練習を取り入れるようにしてください。
- 4) 表現技法に関しては単に名称を書くのではなく、それが用いられることによる効果を説明する事が大切です。作品の読解を授業で進める際には、作品のどの部分でどう表現技法が用いられているか、具体的な例を挙げ説明をすると共に作者が何を意図しそれを用いたのか生徒が意識して読み進める事が出来るよう指導をするようにしてください。
- 5) 原稿用紙の使い方にも誤りが多く見られました。句読点は行頭に置かない、作品名や引用部分はカギ括弧で括る等の基本的な原稿用紙の使い方は授業の中でもきちんと指導をするようにして下さい。
- 6) 受験者名が明記されている答案がいくつかありました。名前は答案には書かないということを受験者に認識させるようにしておいてください。
- 7) 日本文学を2つ扱って書いている答案がありました。SLは、翻訳文学と日本文学を必ず1作品ずつ扱うよう指定されています。扱う作品を選択する際には注意が必要です。